

半球形有孔滑石製品について

はじめに

福岡市拾六町宮の前F地点2号住居址より半球形有孔滑石製品が出土した。(第5図参照)
これは現在まで名称・時期・用途ともに確定されていなかった。ここで名称を半球形有孔滑石製品と呼称することとした。この半球形有孔滑石製品の時期は弥生終末期のものであろうとは推定されており、又用途も南方民俗例からいろいろの推測がなされているが、未だ公表されていない。そこで私達は、現段階における半球形有孔滑石製品の出土地と時期決定を行い用途^①確定のための研究資料として提示したい。

(1) 遺物の実例

半球形有孔滑石製品の出土地は第1表に示すとおりである。

第1表 半球形有孔滑石製品出土地名表

	地 名	大 き さ 径 高 (cm)	重 量 gr	孔	出土状態	備 考
1	福岡市姪ノ浜浦山弁天町	12 × 8.1	1,820	2 孔	住居址	1935年3月出土 九大蔵
2	〃 〃 〃	11		2 孔	〃	〃 〃
3	〃 比恵 古賀			2 孔		1938年環溝住居址調査の際出土 森貞次郎氏御教示
4	〃 香椎 松崎舞松原			2 孔		森貞次郎氏御教示
5	〃 有田、西福岡中学校蔵品	19.4×10	5,800	2 孔		西福岡中学校蔵
6	〃 犬飼 (現博多駅)	12.2×7		2 孔		長崎市清島省三家蔵 1960年頃国鉄現博多駅工事中出土
7	〃 聖福寺蔵品			1 孔		聖福寺蔵
8	福岡県糸島郡前原町潤古屋敷	11.8×9.2	1,940	1 孔		1953年12月18日出土九大蔵
9	佐賀県唐津市徳須恵			2 孔		東亜考古学会による唐津調査時の 周辺調査の際出土
10	長崎県平戸市度島中学校蔵品	11.4×8.2 (底径10.5)		2 孔		京都大学平戸学術調査報告 1951
11	鹿児島県大島郡知名町					1967年3月三島格氏実見
12	福岡市拾六町宮の前	9.8×5.1 (復原値)		2 孔	住居址	1970年7月調査

福岡市姪浜浦山弁天町の住居址より出土した半球形有孔滑石製品は2例ある。1例(第10—2、図版11—2)は底部径11.3cm、最大径12cm、高さ 8.1cm、重量 1.820 g をはかる完形品である。2孔をもち、中心部の孔は径 2.2～ 2.8cmで、上下両方から窄孔している。小孔は径 0.7～ 1.9 cmでこれも両方から窄孔している。表面には横方向にノミで削って仕上げた痕が観察される。他の1例(図版11—1)は底部だけを残すのみで径は11cmをはかる。

福岡市西福中学校蔵品(第10図—5)は大形の完形品であるが半球形と呼ぶにはふさわしく

ない。径は19.4cm、高さ10cm、重量 5,800g である。横方向に削って仕上っており、稜が明瞭に観察できる。底部の近くは縦方向にノミで削っている。中心部の孔は両方より窄孔し、下半分は窄孔したのち横に削って仕上っている。孔径は3～3.6cmである。小孔は明瞭に両方より窄孔した痕がうかがえる。孔径は0.8～2.4cmである。

福岡市犬飼（現博多駅）出土の例（第10図－4）は、底部径10.6cm、最大径12.2cm、高さ7cmの完形品である。表面の仕上げは良好で、磨きが丁寧なために稜はほとんど認められない。底部は上げ底を呈している。中心部の孔は上下両方より窄ち、径は2.3～3cmをはかる。孔径0.3～2cmの小孔は両方より窄孔した痕が明瞭である。これは現在、長崎市の中川町清島省三氏の蔵品となっている。

福岡市聖福寺蔵品（図版11－5）は径13.4cmで、中心部の1孔を有する完形品である。

福岡県糸島郡前原町潤古屋敷出土品（第10図－1 図版11－3）は、聖福寺蔵品と同様に中心部の1孔を有する完形品である。孔径は2.1～3.1cmで上下両方より窄孔している。表面はノミで仕上げた痕が明瞭に観察できる。底部径8.3cm、最大径11.8cm、高さ9.2cm、重量1,940gをはかる。

長崎県平戸市度島中学校蔵品は、京都大学平戸学術調査団によって報告されたものである。②
底部径10.5cm、最大径11.4cm、高さ8.2cmで、中心部のは上下両方より窄孔しており、孔径は2.1～3.7cmである。小孔も両方より窄孔した痕が明瞭である。孔径は0.9～1.7cmをはかる。

鹿児島県大島郡知名町の例は、信仰の対象となっている旧屋敷跡の集石の中で、三島格氏によって発見されたものである。滑石製であるかどうかは分らない。

他に鹿児島県嚙嚙郡志布志町公民館に類似品があるとのことである。③④

(2) 時期の決定

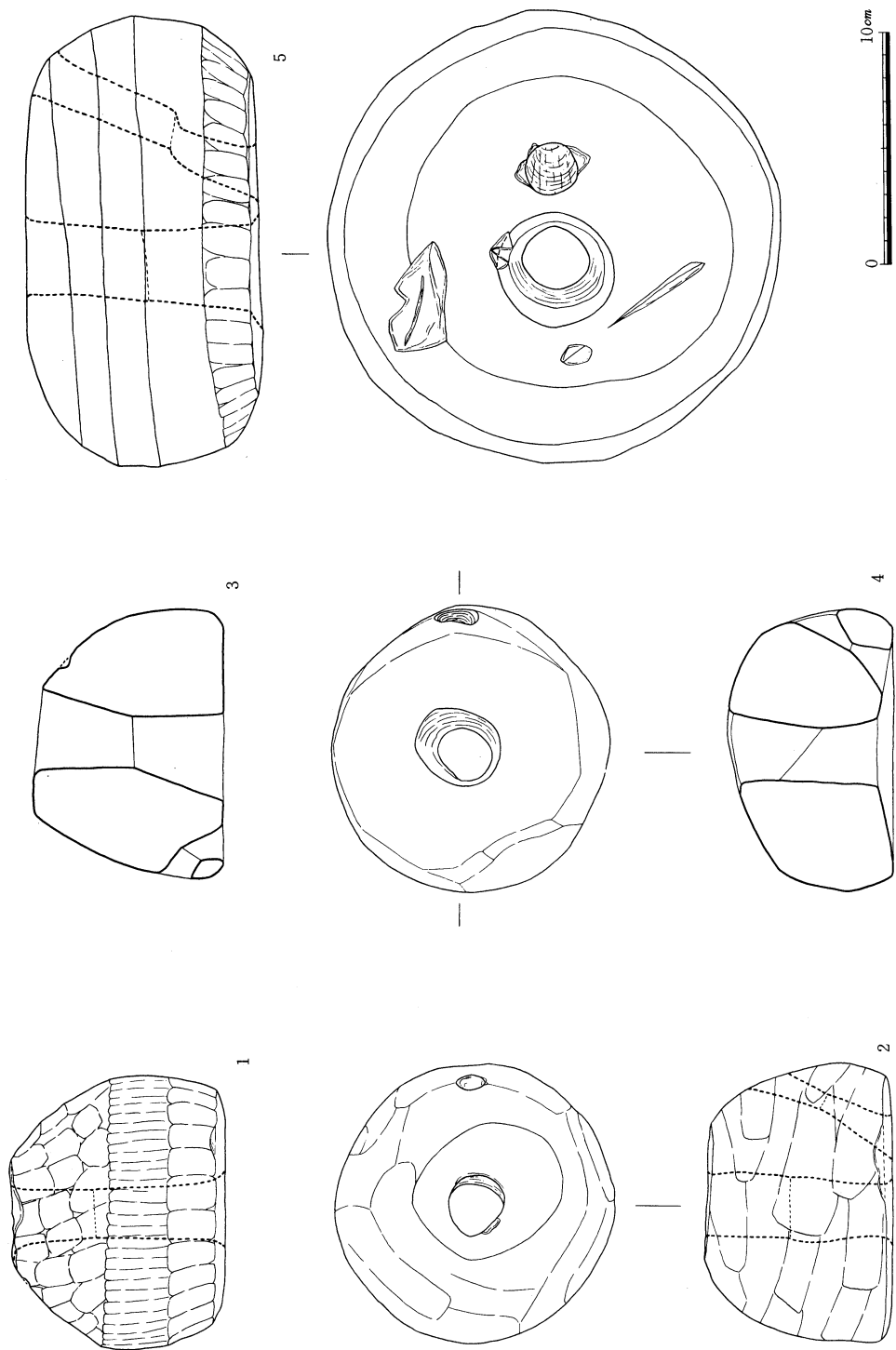
半球形有孔滑石製品の時期は、拾六町宮の前F地点2点住居址の伴出土器によって、弥生終末期のものとして確定できたが、この石器の資料収集の際に、福岡市犬飼（現博多駅）出土の半球形有孔滑石製品と伴出した土器の好資料を得たので紹介して時期決定の補強をしたい。

この資料は現博多駅建設工事中に出土した一括資料である。

⑤
第11図－1は口縁径8cm、器高7.4cmの小形鉢である。器高は非常に部厚いが口縁部内面は若干細くなり、稜をつくる。底部は丸底に近い平底を呈する。外面上部は6本単位の櫛で縦横に調整し、下部は櫛で調整したあとをへうで削っている。内面口縁部は刷毛で横方向に調整し、稜より下部は粗い櫛で調整したのちにへうで削っている。底は指でおさえている。胎土には砂粒を多く含むが焼成は堅緻である。色は灰褐色を呈し、一部は黒変している。全体としては、非常にいびつで手づくね土器と思われる。

第11図－2は、脚台付鉢の脚部である。脚部の器壁は薄い、鉢の部分は部厚い。胎土には砂粒を含み、焼成は堅緻である。調整は内外共に細い刷毛で行っているが、脚裾末端部の外面は横になでて刷毛目を消している。

第11図－3は、蓋形土器の頂端部である。細い砂粒を少々含むが胎土は精製された粘土を用



第10図 半球形有孔滑石製品実測図

(1. 福岡県前原町潤、2. 福岡市姪之浜浦山、3. 長崎県平戸町度島中学校蔵品、
(4. 福岡市犬飼(現博多駅)、5. 福岡市有田(西福岡中学校蔵品))

いており、焼成は硬い。色は薄い褐色を呈する。外面は細い刷毛で縦方向に調整したのち、一部をヘラで削り、刷毛目を消している。

第11図-4は器台である。器高16.4cm、口縁径11.6cm、底部径14.6cmをはかる。胎土は砂粒を含むが、焼成は堅緻である。内外面ともに丹塗りをほどこしている。外面は叩き整形をほどこしたあとに細かい刷毛で縦方向に調整しているが、口縁部裾部末端までは刷毛目を入れず叩き痕が明瞭に残っている。内面はしぼりの痕が残るが下半分は横方向に刷毛で調整したのち、指でおさえて刷毛目を消している。

第11図-5は杵形器台である。突出部を若干欠くが完形品といえる。器高は9.6cm、底部径9.6cm、上面の径5.5cmである。胎土には細粒の砂を含み、焼成は堅緻である。色は褐色を呈する。外面は縦方向に櫛で調整したのち、なでて櫛目を消している。底近くには横方向の櫛目が残る。内面は櫛で横方向に調整した後に横になでて櫛目を消している。上面は粗い櫛で削り、稜部は櫛で刻目を入れている。

第11図-6は、5と同じく杵形器台である。器高11.3cm、底部径14.7cmをはかり、この種の土器では超大形品といえる。これも突出部の一部を欠いている。器壁は厚く、胎土には砂粒を含み、焼成は硬い。色は褐色を呈する。内外共に粗い櫛で調整をほどこしている。外面には一部ヘラで削った痕もみられる。

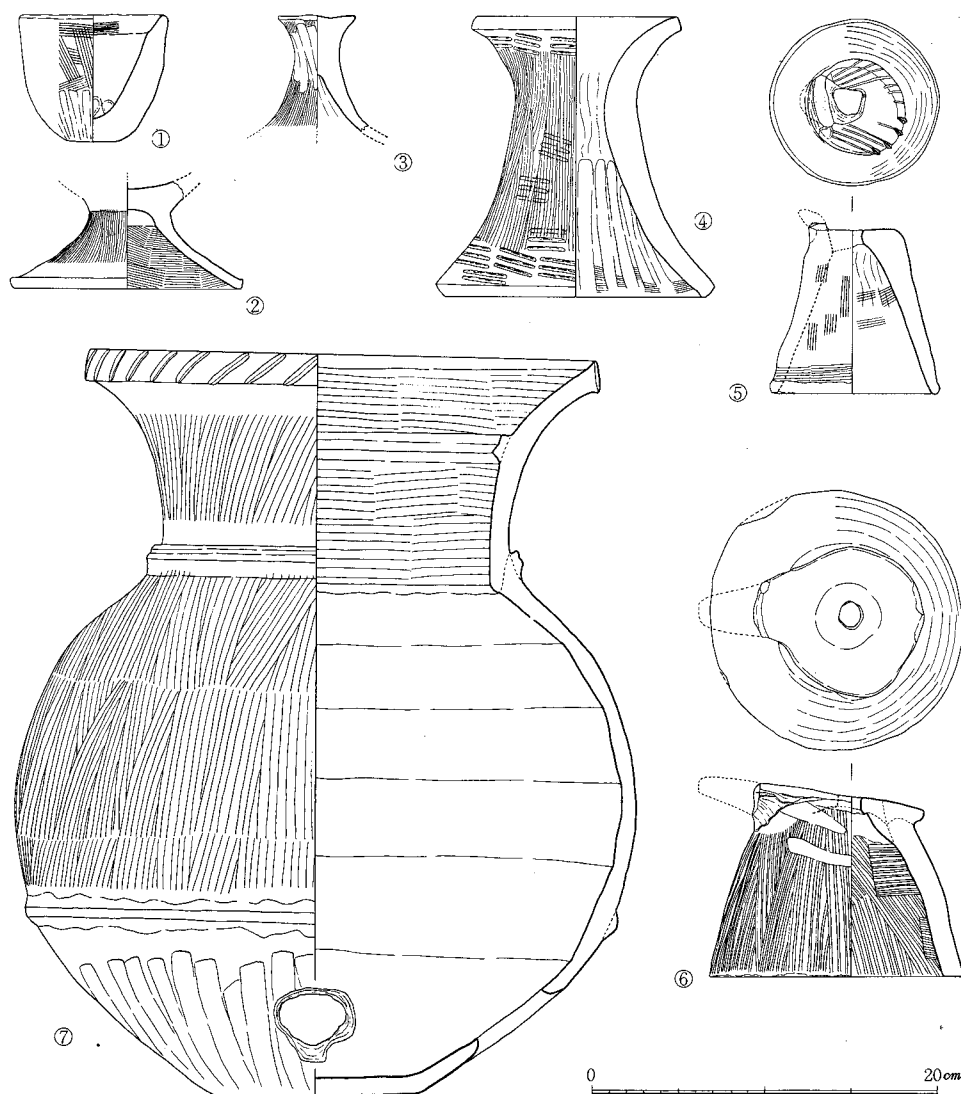
第11図-7は大形の壺で、器高43.5cm、口縁径29.3cm、底部径12cm、ほぼ胴部中央部あたりの高さ17.5cmのところに胴部最大径があり、36cmをはかる。器壁は厚く、胎土には精製された粘土を用い、焼成は堅緻である。口唇部にはヘラで大きな刻目を入れ、肩部・胴下半部に貼付凸帯を有し、頸部内面の口縁下5cmのところに蓋うけの凸帯を有する。外面の調整は縦方向に粗い櫛で行っている。胴凸帯より下はヘラで削り、櫛目を消している。頸部内面は横方向に粗い櫛で調整し、胴部は縦横に櫛目が入り乱れるが、上半部は縦方向が多い。又内面は粘土帯の継目が明瞭に観察できる。この土器は底部は丸底に近くなった平底を呈し、全体としては胴は球形に近い。この壺は底部に近く、径5cm程の孔が焼成後内側より窄たれているので、小児用の壺棺として転用されたものと思われる。

以上7点の土器を紹介したが、これらは3を除いてすべて弥生終末期のものである。7は終末期の中では比較的古い部類に属すると言えよう。3の蓋は現在のところ後期の蓋の資料を欠くので何とも言えないが、前期・中期の蓋形土器とは若干形態を異にしており、又7の壺に蓋うけの凸帯もあるので、あながち終末期に属する可能性を否定することはできない。これらの土器には、二重口縁に櫛目波状文、竹管文がほどこされた土器をも伴出しており、したがって福岡市犬飼の全体としての時期は弥生終末期から、それをやや下る時期（弥生～土師期への転換期）までとすることができる。拾六町宮の前F地点1号住居出土の壺の中にも、時的には若干下る可能性のある土器（第4図-3）も存在している。したがって半球形有孔滑石製品の時期は、弥生終末期からそれをやや下るまでの時期（弥生～土師期の転換期）を設定することができる。

(3) まとめ

半球形有孔滑石製品は、海岸に望む所、又は当時海岸附近と推定できるような砂丘上の遺跡、又は河の下流域に分布している。このことは漁具としての用途をもつ石器としての可能性を大きくしている。福岡県教育委員会の調査の際に大形の不定形な有孔滑石製品が出土し、報告書はこれを大形漁網用、又は小形舟の錨とも考えられるとしている。^⑦重量 2,000g 程度では碇として考えるのは困難である。しかし、県・市教委、それに私達の調査したなかで、多くの石錘を出土しているのでこれらとの関連からみても、漁具としての用途をもつものとするのが妥当である。

この石器は現在の分布からみても今後九州各地の海岸部附近より出土例を増すと思われる。又用途を明らかにするにはいたらなかったが、南方との関連を示す数少ない資料の一つであるの



第11図 福岡市大飼(現博多駅)出土土器実測図

で、南方民俗例との比較研究を今後の課題としたい。現在まだ不十分な資料聚成の段階であり、不備な点を御教示願えれば幸いである。(橋口達也)

- ① 漁具説、分銅説等の諸説がある。
- ② 京都大学平戸学術調査団「平戸学術調査報告」1951
- ③ 「台湾の民俗例で石斗母と呼ばれる、秤の分銅に使用された石製品に類似しているので記憶にあたらしい」との三島格氏の御教示があった。
- ④ 上村俊雄氏の御教示による。孔の有無、石材はわからないので今回は省略した。
- ⑤ この資料は一部をのぞいて、福岡県浮羽郡浮羽町田主丸、中央ホテル蔵となっている。そのうち第11図、2・3・5・6、は九大考古学研究室に寄贈をうけた。
第11図-1は長崎市 清島氏蔵となっている。
- ⑥ 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性—九州—」日本の考古学Ⅲ P.55. 図9-6
- ⑦ 福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 1970

〔追補〕博多駅地下工事中出土の網目土器(第12図)

福岡市犬飼、博多駅地下工事中に出土したものであり現在、九州大学文学部考古学研究室に保管されている。前述の半球形有孔滑石製品を伴出した土器と出土地点が異なり、近世の遺物等を伴出している。

口縁部末端を欠失し、現在高は37cmを測るが復原高は38~39cm程度と考えられる。胴最大幅は中央部にあり33.2cmである。頸部は外反し、くびれて胴部につづき底部は径3.5cmで丸底に近づきつつある平底を呈している。胎土にはほとんど砂粒を含まない精製された粘土を用いており、焼成は硬い。色は黄褐色を呈するが部分的に丹塗りの痕跡があり、本来は丹塗りの壺であったと思われる。調整は、頸部外面はハケで縦に行い、頸部と肩部の接合部は横になでている。胴部外面はハケで調整した後、丁寧にヘラで磨研しているが、肩部は磨研が粗く、ハケ目が部分的に残っている。頸部内面はヘラで磨研し、胴上半部内面は縦方向にハケで調整した後になでてハケ目を消し、胴中央部にはヘラで削った痕跡もある。下半部はハケによる調整を行っている。胴部内面には接合の痕がよく残り、ハケの方向もその接合部を境として方向が異なっている。時期は前述の半球形有孔滑石製品を伴出した土器等と同様弥生時代終末期に属するものであり、形態的には東九州の土器の要素を多分に認められる。特記すべきことは、第12図に示すように網目の痕跡が認められることである。この網目は擦痕として残っているので、網に使用した用材はわからないが、網目は斜方向に編んでおり大きな菱形を呈している。肩部、底部は擦痕が残っていないので、末端部はどのような編み方をしていたかはわからない。この網目で壺を覆う例は奈良県唐古遺跡の船橋式(縄文晩期)の壺などに例があり、携帯移動に際して、破損しないように土器を保護することが主要な目的であるとされている。^⑧ (橋口達也)

⑧ 末永雅雄、小林行雄、藤岡謙二郎「大和唐古弥生式遺跡の研究」